

日露/ソ境界地域における境界変動と住民：

サハリン/樺太とクリル/千島

中山大将

本報告は、近現代のサハリン/樺太およびクリル/千島における境界変動において、境界変動が在来住民の退去（引揚げ）や新住民の移住だけではなく、在来住民の残留をも引き起こすことを示す。これは、境界変動にともなう退去と残留が日ソ戦争に特有な現象ではなく近現代のサハリン/樺太およびクリル/千島において普遍的な現象であったことを意味している。本報告では、退去と残留という現象を、戦争という観点からではなく、境界変動という観点から論じることで、境界地域住民に対して境界変動が与える影響について明らかにする。

本報告では、サハリン残留日本人と日本人樺太引揚者、サハリン残留朝鮮人を比較し次の点を指摘する。(1)引揚者はサハリンへの帰還権ではなく領有権返還を要求した一方で、冷戦期およびポスト冷戦期の残留日本人・朝鮮人の永住帰国は必ずしも離散家族の再統合や先祖の居住地への帰還を意味しなかった。残留者も引揚者も、地理的な「故郷」での生活よりも「祖国」での生活を望んでいた。境界変動を通じて両者は「祖国」の一部分としての「故郷」を喪失したと言えること。(2)残留は再境界化過程における退去の不徹底によって発生し、跨境化過程における低位の透過性がかつての生活圏を分断することによって継続すること。(3)個人的生活不安や、離散家族あるいは現在の世帯員の意向といったミクロレベルの要因も、国際関係による低透過性のようなマクロレベルの要因と同様に残留の継続の重要な原因となったこと。